奇蹟の生還

笹井　重次

母が私を呼んでいる。何度も、なんども呼び続けている。返事をしようとしても声にならない。これは誰にでも夢によくある現象である。しかし私のこの場合は生死の境を彷っていた。起き上がろうとしても全身がしびれてまるで身動きが出来ない。目を開けようと思っても開かない。渾身の力をふりしぼってやっと右手で目をこすってみた。かすかに開いた目にうつったのは、その手についたどろどろとしたまっかな血のりのせいであった…。

私達の部隊というのは、対ソ戦に備え黒竜江の渡河を目的の任務で日頃から訓練をつんできた重工兵隊であった。昭和二十年八月九日の夕方の事です。一日の作業の汗をドラム缶の風呂で流していた私に、八面通で陣地構築作業中であった部隊本部から日ソ開戦の急報が入ったのです。牡丹江で新兵舎の設営にあたっていた兵と共に、戦場向け最後の列車に乗り込んだ。夜になって機関車の焚く火を目標に幾度かミグの攻撃を受けたが幸いムーリンで指令部の一部に合流する事が出来た。意外にもその時は既に敵の大型戦車に追いまくられ、後退も余儀なくされていたのです。

その司令部の勤務兵はS見習士官を長とした約五十名程だったと思う。昨夜乗って来た列車が最前戦から再び下って来た。S見習士官が割合に体の弱い兵と共にこの列車に乗ることになり二分して残り半分の強健な兵と私は徒歩で後退する任務を受けた。

負け戦さです。携帯食糧とて何一つの用意もなく出発したのである。八月の猛暑が照りつけ上衣に汗で白い地図を画いた様な模様が出来る。それがだんだんと大きくなる。目が廻る様な空腹がおそってくる。したたる汗をぬぐいながら凹地の水を取合って飲んだ。そしてひたすら歩いた。空からは餌を狙う鷹のように、敵機は乗った飛行兵の顔が見えるような低空で機銃を撃ち込んでくる。腹這いになって身を隠し再度出発しようとしたら人員が足りない。くたびれて水腹で寝てしまっている者もいた。こんな事をなんどか繰り返し、ふらふらの行軍が続いた。戦況は益々悪化して代馬溝から磨刀石方面へと逐次守備軍は縮まっていった。ここで列車で来たS見習士官と再び行動を共にする事になるのだが、もう夜も八時頃だったと思う。列車で着いた兵も銃撃を受けて相当な死傷者が出たと聞いた。歩いて来た私達の方が無傷だったとは…。

明けて十一日早朝兵をつれて山を下り、小さな谷川で朝めし焚きの仕度をしていた。その頃だった。山上に敵戦車が近づいたとS見習士官からの伝令が次々と来た。私達は朝飯どころではない。二㎞程の道のりを山上へとかけ登った……。

大東亜戦争も終結が近づいていたのでしょうか？当時の関東軍には、苦闘を続ける南方へ、精鋭といわれた兵力と共に、優秀な兵器が送りつくされていた。そのために飛行機なく、戦車なく、又敵戦車を攻撃する速射砲とてなく、肉薄で爆薬を抱いて体当りするより外なかったのである。勇敢というか、無謀というか、我が軍は迫ってくる敵戦車に向って肉薄攻撃で体当りを繰り返した。だが先のノモンハン事件で我が軍に多数の戦車を炎上、擱座

されたにがい経験を積んで改良されたソ軍の重戦車には到底これが通用するはずがなかったのであるが、この日本兵の勢いに押されてか、一旦は引上げ、再度、再々度と数を増して迫って来た。我が軍の死傷者はふえるばかりであった……。

私の頭はガアーンガアーンと早鐘のように鳴っている。そして心臓の鼓動が、トットッと高く危急を知らせていた。私は漸くにして意識がもどったのです。頭、顔とさわってみた。流れ出た血液でどろどろである。あっ頭をやられている。そして顔も……そう思った。左手が腹の上に乗ったままで、どうしても動かない。動かないはずです。手首の動脈に鉄片が突きささっていて、心臓の鼓動のたびに三十㎝もピューピューと高く血液が噴出しているではないか。後でわかった事だが、お陰で頭には負傷はなく、その手首から噴き出した血が頭や顔に降りかかっていたのです。

負傷はその左手と腹部から両足にかけてである。軍服はずたずたになっていて、ちょっとさわっただけでもぼろぼろとやぶけた。私の体はもう動かない、それでも不思議と生きていたのである……。

血が噴き出している左手首を固く握って、やっとの事で体を前に起した。遥か前方でちらちらと動き廻っている兵隊を見付け呼ぼうとしたが声が出ない。爆発の衝撃で意識を失いその間に出血して、喉に火がついたようでからからである。立ち上がろうにも全身の自由が全くきかない。あせればあせるほど声にならない。漸くにして気付いてくれたのか衛生兵が来た。手首にぐるぐると一巻全部の包帯を巻きつけてくれたが、それでも尚ぷくぷくと血が噴き上げてくる。私は衛生兵の剣を腕に当て止血をさせた。そして頭の高さ位迄手を上げてやっと出血が弱くなった。

復員してわかった事だが、母が私の出征した日から一日として休む事なく、雨の日も、風の日も村の氏神に日参して、武運を念じていたそうな、その母の願いが私を呼び起こしてくれたのでしょうか?……

下半身の被服は衛生兵の鋏によってはちきられた。軍靴も切り取られた。そして仮包帯の手当てが出来た。好運というか前線より下がって来た一台のトラック、荷台には爆薬や弾丸の木箱がぎっしりと積まれていた。その上に数人と共にほうり上げてもらったのです。止血した剣先をその木箱に突きさして左手を高く上げ出血を防いだ。悪路が延々と牡丹江にと続いている。弾薬箱の上でぐらぐらと、不安定な数時間が過ぎたのです。しびれていた体は痛みに変ってきた。奥歯をぎりぎりとくいしばって痛みに耐えた。やっとの思いで牡丹江陸軍病院の門前にたどりついたのである。だがいくら待っても入門の許可が出なかった。運転手に聞くと既に野戦病院の方へ引越したそうです。残務整理中の軍医が書類の焼却をしていて、それが済み次第同乗するという。相当な時間が過ぎて車は走りだした。距離や時間の覚えがなかったが確か五時頃だったと思う。元の日本人小学校がその野戦病院らしい。車から降ろされ軍医の診断があった。無数の破片が左手と腹部に又両足は骨髄に達しているという。そしてあと数分意識が戻らず出血が続いていたら、出血多量とやらで恐らく助からなかっただろうと……。

破片の摘出手術などしている余裕がない。ソ軍戦車が刻一刻と近づいているのである。健康な衛生兵は患者よりも先ず抗戦の準備で忙しかった事を思い出す。

包帯交換が済み、始めて白衣というものにご厄介になったのです。看護婦が来て、ほしいものがないかと聞いてくれた。出血のために口や喉がからからの私は欲徳なしで水といった。当時は重傷者には水は大敵で絶対に与えなかったそうです。だがこの場合はすぐにカルピスをとかした甘い水を腹一杯のませてくれたのです。とにかく片づく者は一人でも早く片づけた方がよかったらしい。前線からは重傷者がどんどんと下がってくるのです。水のききめは意外に早く、うまかったと思ったのも束の間、昏睡状態に入ったのである……。

だが私もそう簡単には死ねなかった。七十七kgの体重がものをいったらしい。十五時間振りに再び正気にかえったというのである…。その日急遽負傷者の後送が命ぜられたらしい。校庭にさげ出されて再診断があったが、何故か私はすぐ元の病室へといわれ再び校内へ運び込まれた。吃驚した事に今度は声をかけても知らずにうめいている重傷者と同室である。どうした事か尋ねなければと誰か来るのを待っていた。大体の患者は病院のバスで牡丹江駅へと運ばれた。夕方近くだったか、最後の見廻りの衛生軍曹がコツコツと通りかかった。私は待ってましたとばかり呼びとめて事情を聞いた。あなたは重傷だから後送してもどうせ途中で駄目だろうと……、私は何という事だお国のために戦って負傷したら、おいてけぼりにする心算かと、いきまいた。衛生軍曹は困って軍医に相談するといって出て行った。其の間何分か、何十分かが経過した。まあ私には一生を通じて、この待ち時間程長い時間がなかった。

私はもうとても後送の仲間入りは出来ないだとうと諦めていた。その時軍曹が二名の兵を連れて担架を私のそばに置いた。そして重傷だが気持ちと口だけは、しっかりしているらしいから、一応後送する事にしたと……。私は何も言わずにただ寝ていたら恐らく祖国の土は踏めなかった事でしょう。これこそ神の助けか…、最後のバスで漸く牡丹江駅へ運ばれたのです。そこには空のドラム缶がぎっしりと立てて積まれた無蓋貨車があった。毛布を一枚敷いてその上にねかされた。危機一髪最后に私が乗せられて間もなく汽車は発車した。どうやらハルピンに向っているらしい…。

自分のものとて何ひとつなく支給された白衣一枚で、八月といえば内地ではまだまだ暑い盛り、北満の日中もやはり暑いが、夜になると大陸冷えというやつで寒くなってくる。

そこへ一しきり雨が降ったのです。大切な白衣も雨で血がにじんで赤いというより黒くなってしまった。実は負傷して以来まだ一度の小用もしていなかったのです。寒さのせいか、それとも夕べのカルピスのせいか?腹がポンポンになって来た。苦しい事、苦しい事、何度となく用便を試みたが、爆創の痛みで、きばる力がない。益々腹がはってくる。とうとう無意識で衛生兵に刺し殺してくれといって困らせたそうな。汽車はまっ暗い広野をひたすら突走っている。夜中頃か満杯になった尿のために、安全弁が開

いたか自然と出はじめた。丁度ドラム缶の間に、なりふりかまわずにたれっ放しである。これこそほんのチョロチョロと、出まかせであった……。

幾駅も幾駅も放尿が続いた様な記憶がある。これでやっと人心地がついた。うとうととして夜が明け、ハルピン駅に着いていたのである。ここで始めて病院列車というものに乗り換えた。身動き一つできない私は担架で窓から車内に押し込まれた。この時のまあ痛かったの、痛かったの今だにあの時の痛さが思い出される。これでよほど安心したのか深い眠りに入った……。

どれほど眠ったか車内が異常な迄に、ざわめいていた。八月十五日重大な放送があったとかで、輸送指揮官から発表された。終戦の詔勅であったのだ。車内は一斉にすすり泣きと変った。私達は何のために、こんな異国で誰のために命を的に戦ったのかと……。この病院列車には千二百人の患者が乗っているとも報じられた。この人達のこの時の気持ちは如何ばかりだったか、まるで放心した人達の団体を運んでいるようであったと思う。

各所で着々と日本軍の武装解除がなされていると車内放送で聞いた。このためソ軍の暴行、満軍の反乱暴動そして略奪、列車は幾度となく妨害され立往生をした。輸送計画の狂ってしまった大世帯の列車給与（食糧）が停滞してしまったのです。

あちこちの患者がひとしきり水、水と力なく看護婦にせがんでいた事を私は今でも幻のように思い出すのです。水といっても内地のように何処にでも飲水がある訳ではない。看護婦が苦労の末やっともって来た時には、もうこの世の人ではなかった。毎日のようにこうして重傷者から逐次家族に見守られる事もなく寂しく天国へ旅立っていったのです。

後送の時に一番最後に仲間入りをした重傷の私こそ気が気でなかった。この次は自分の番か、今度は自分の番かとね……。

七十七kgの体も今はもう出血の後の絶食ということで骨と皮、見る影もなかった。脛ばかりが大きくなった自分の足を見て、とてもこの世のものとは思えなかったものです。列車が停まるたびに衛生兵によって死体が運び出された。どうやら線路の近くへ埋葬したと言っていたようだ。こうしてもの言わぬ負傷者は何処の誰かも分からずに……。

衛生兵や看護婦は多少のお金は持っていたし物々交換も出来た。然し負傷して持ちものを全部なくし白衣一枚の無一文者には、空腹も只我慢しかなかったのです。新京、奉天そして私達が着いたのは遼陽であった。確か昼前だったか、駅のホームへ白衣の患者が見事な迄に並べられた。牡丹江駅を出発して丁度七日目だったそうです。この間に与えられた食事というのは、ほんの命をつなぐ四個の小さなにぎり飯だったのを今も忘れはしない。

遼陽には第一陸軍病院と第二陸軍病院があって輸送バスが駅との間をフル運転した。私は夕方やっとの思いで第一陸軍病院に収容されたのです。ここで初めて患者名簿に記載され、外科の病室にベッドが決定した。早速夕食として熱いみそ汁に白いご飯、おかずというようなものは外になにもなかったが、この味噌汁の香りが鼻に入った。この時の有難さ、涙が後から後からとこみ上げて頬をつたった。生涯にこれ程食事に感謝した事は今だかつてな

く、とめどなく泣けた。只有難く……。

満州も九月に入り早くも秋の気配が漂っていた。丁度其の頃の事であった。占領軍であるソ軍司令部が近くにあり、そこの士官が私達遼陽第一陸軍病院へよく来たものだった。そして病院長大屋音市大佐の立派な乗馬に目を付けて暫く貸せと言ったそうな。敗戦のお蔭でいや応なしに連れて行かれたのである。それから約半月も過ぎたある日私の戦友であったN軍曹が院長に呼ばれ、ソ軍司令部へ行って馬を返してもらってくる様に言われたのである。N軍曹は顔に負傷していた。鼻の内側にチェッコ銃弾が入ったままだったが、いたって元気であった。兵を一名従えて指令部のその若い士官に面会を求めた。だがその時は不在で、乗馬運動に出たと聞きその方面へ捜しに行った。漸くにして見付けた士官は、悠々とご機嫌ご満悦で馬上にそっくり返っていたそうな。早速馬を返せと交渉したが、腰の短銃を身構えて射つとおどし中々返そうとしない、然し院長に呉々も頼まれているし、執拗に食い下がっていたらしい……。

折も折前方から馬車が来てこの士官とすれちがった。馬車には素敵な美人の中国娘がその母親らしい人と乗っていた。これを見た士官は、短銃を突きつけて馬車を止めた。そしてこの二人を馬車から降ろし馭者に早く行けとおどした。すきがあればと馬をねらっている軍曹等二人は一定の距離を保ちながら何事が起こるのかと固唾をのんで見ていたそうな……。士官は馬から降りた。そして早速娘に着衣を下げろと手まねした。娘は泣いた。母親も共に泣いて手を合わせた。だが若い士官は益々いきり立って短銃でおどした。やむを得ない命あっての物種か、娘はしぶしぶと着衣を下げた。士官はあわてて娘を押し倒し、その上に馬のりになった。片手に短銃そして馬の手綱も離せない。離したら最后、こちらで軍曹ら二人が待ち構えているのだ。立木一つない草原である。咄嗟の迷案致し方なく士官は自分の足に馬の手綱をくくりつけた。そして自分も着衣を下げた。綺麗に咲いたあの花もあわや無惨にもと思った。その時だった。天の助けか通り雨、泣く泣く路頭にくれていた母親がせめて我が子が濡れない様にと持っていた洋傘をパッと開いた。この開いた処が悪かった。馬の鼻面だったとは……。驚いたの何のって、ものすごい勢いで一気に馬は駈け出した。残念な事にこの馬の手綱は先の士官自身の足にしばり付けられている。士官は何事か訳の分からないことを必死で叫んだが馬が驚くばかりであった。猛り狂った一物も大地にこすりつけられて、怪我だらけ見る影もなかったそうな……。親娘はこの時とばかり後も見ずに逃げ去った。

この情景を見た軍曹等二人、病室へ帰って戦友達に、もうすぐ怪我の治療に来るからみんなで見ろともう病院長の馬の事などそっちのけ、そしてご丁寧にも病院の衛生兵にはヨーチンをたっぷりと付けてやれと言っていた。間もなく士官がやって来た。ヨーチンを塗るや否や躍り上がって痛がる士官、これを覗き見て私達は留飲を下げたものでした……。

私の闘病生活はこれから約八ヶ月にわたって続くのですが、この間にソ軍の暴行、掠奪そして抑留とひっきりなしに行なわれた。幸か不幸か重傷だった私は、かろうじてこれらを免れたのです。

戦争は終わっていた。それでも院長はじめ病院関係者の献身的な手厚い看護によって、次々と負傷者は健康をとりもどした。

こうしたある日、突然国府軍（蒋介石軍）と中共軍の内戦で、負傷した多くの患者を抱え前線から下って来た中共軍病院の強要で、その患者達を看護するための、日本人衛生兵数十名と看護婦約五十名が奉仕として出発するというのです。快方に向っていた私は院長の命をうけ、その護衛として兵四十七名と共に中共軍の一員となった。

これは私も心からの病院に対する報恩の心算でもあった訳です。その頃の国府軍の勢力がとても強く押され、押されて戦火をさけ、田舎の農家に寝泊りを繰り返し、患者を守りながら通化省の通化迄、中共軍と起居を共にした約半年に亘る放浪の旅が続くのです。内地では親兄弟が私が生死も分からずに気をもんでいたという事も知らずに……。

当時戦車地雷に倒れ、意識を失い記憶喪失に陥っていた私の然も遠い四十年前のとぎれとぎれの思い出を、お奨めを頂いて一生懸命拙い文にまとめました。帰還を夢みながら何一つ言い残す事もなく、淋しく去っていった戦友のご冥福をお祈りすると共に再び戦争というものがなく、何時までもこの平和が続きますことを願う一人でございます。

私の心の奥底に引掛っていたあの野戦病院で、ものも言えずに隣のベッドで寝ていた人達、そしておいてけぼりにされた方々、病院列車がハルピンを出発して間もなく、衛生兵や看護婦に私は聞いたのですが、枕元に甘味品と共に手りゅう弾を置いて来たと言う事だった。はたしてその手りゅう弾は、どの様に使われたのか？敵に……いや自爆？……私は戦争と言うものの残酷さを今尚思い出しては、こうして夢にまで見た祖国の土を踏むこともなく散っていった人達の御霊に手を合わさずにはいられないのです。

そして毎年のやうに冬の寒さがやって来ると体内に大切に残された無数の破片が戦争と言う痛みを私に知らせている。こんな痛みこそ誰にも味わってもらいたくないと思うばかりでございます。

昭和五十年の春であったか、開業した事業も十年目、仕事もやっと軌道に乗って忙しく働いていた時期でした。元工兵隊司令部の同年兵であるNさんから戦友会で戦没者の慰霊祭が営まれ、三十回忌の法要をしたからと戦死者の家族宛に通知をくれた。

実はその戦死者の名簿に私も記載されていて、共に三十回忌をして頂いたと言う事でした。私の負傷した時の状況を誰かが伝えたからでしょう。誠に有難い戦友方のご厚意でした……。

生還を知らせた私には、その年の戦友会から招待状も届き早速皆様の前で亡霊ではなく、確かに足があるところを見てもらった。

それ以来の会合には、当然私も健康の許す限り参加している次第です。

紀ノ川恋し

作詞　笹井 重次

一、瀬音懐かし昔が恋し
川面に映える屋形船
影を写した竜門山が
墨絵のやうにゆれている
今年もみかんが豊作だ
流れ流れてァァ和歌の海

二、四十八瀬の流れは清く
岸辺をなでる波静か
十九の夏を思い出す
君と出会ったあの夜の情
心の奥にいつまでも
流れ流れてァァ和歌の海

三、二人で眺めた妹山（いもやま）、背山（せやま）
今は帰らぬ思い出か
月影落ちて白々と
遠い昔がよみがえる
心に残る恋の傷
流れ流れてァァ和歌の海

ゲートボールの唄

作詞　笹井 重次
作曲　北田　勝

一
（練習）
花咲く春の一日を
今日も楽しく練習場
いつもの友が待っている
第一ゲートはお手のもの
今日のタッチも冴えている

二
（試合）
すず風頬に心地よく
今日も楽しく競技場
いつもの友ときそい合う
今日のスパークお見事だ
みんな見てくれこの成果

三
（親睦）
暑さ寒さもなんのその
今日も楽しく河川敷
いつもの友と手を握る
ゲート仲間の語り合い
世間話に花が咲く